

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特 許 公 報(B2)

(11) 特許番号

特許第6395784号
(P6395784)

(45) 発行日 平成30年9月26日(2018.9.26)

(24) 登録日 平成30年9月7日(2018.9.7)

(51) Int. Cl. F I
HO4N 1/00 (2006.01) HO4N 1/00 C
 HO4N 1/00 127Z

請求項の数 7 (全 17 頁)

(21) 出願番号	特願2016-186140 (P2016-186140)	(73) 特許権者	000001007
(22) 出願日	平成28年9月23日(2016.9.23)		キヤノン株式会社
(65) 公開番号	特開2018-50265 (P2018-50265A)		東京都大田区下丸子3丁目30番2号
(43) 公開日	平成30年3月29日(2018.3.29)	(74) 代理人	100076428
審査請求日	平成29年9月22日(2017.9.22)		弁理士 大塚 康德
		(74) 代理人	100115071
			弁理士 大塚 康弘
		(74) 代理人	100112508
			弁理士 高柳 司郎
		(74) 代理人	100116894
			弁理士 木村 秀二
		(74) 代理人	100130409
			弁理士 下山 治
		(74) 代理人	100134175
			弁理士 永川 行光

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 通信装置とその制御方法、及びプログラム

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】

アドレス帳を格納する記憶装置を備える通信装置であって、
前記記憶装置にインポートされるべきアドレス帳を外部装置から受信する受信手段と、
前記受信したアドレス帳についての判定処理を実行する判定手段と、
前記受信したアドレス帳を前記記憶装置にインポートするアドレス帳インポート手段と
を有し、

前記判定手段は、前記判定処理として、前記受信したアドレス帳の名称が、ユーザによる変更に従い設定された名称でないデフォルト名称であるかを判定し、

前記受信したアドレス帳の名称がデフォルト名称であると判定された場合には、前記インポートされるアドレス帳の名称として、前記記憶装置で格納されていたアドレス帳の名称が利用され、

前記受信したアドレス帳の名称がデフォルト名称でないとして判定された場合には、前記インポートされるアドレス帳の名称として、前記受信したアドレス帳の名称が利用されることを特徴とする通信装置。

【請求項2】

前記判定手段は、インポート先として指定された前記記憶装置で格納されていたアドレス帳のデータを削除して、前記受信したアドレス帳のデータがインポートされる場合には、前記判定処理を実行することを特徴とする請求項1に記載の通信装置。

【請求項3】

10

20

インポート先として指定された前記記憶装置で格納されていたアドレス帳のデータに追加して、前記受信したアドレス帳のデータがインポートされる場合には、前記判定手段による前記判定処理が実行されないことを特徴とする請求項 1 又は 2 に記載の通信装置。

【請求項 4】

前記判定手段は、前記判定処理として、さらに、前記受信したアドレス帳の種別と、前記記憶装置で格納されていたアドレス帳の種別とが一致するか否かを判定し、

前記受信したアドレス帳の種別と、前記記憶装置で格納されていたアドレス帳の種別とが一致すると判定された場合には、前記インポートされるアドレス帳の名称として、前記受信したアドレス帳の名称が利用されることを特徴とする請求項 1 乃至 3 のいずれか 1 項に記載の通信装置。

10

【請求項 5】

前記受信したアドレス帳の種別と、前記記憶装置で格納されていたアドレス帳の種別とが一致しないと判定された場合には、前記判定手段が、前記判定処理として、前記受信したアドレス帳の名称が、ユーザによる変更に従い設定された名称でないデフォルト名称であるかを判定することを特徴とする請求項 4 に記載の通信装置。

【請求項 6】

アドレス帳を格納する記憶装置を備える通信装置における制御方法であって、前記記憶装置にインポートされるべきアドレス帳を外部装置から受信する受信工程と、前記受信したアドレス帳についての判定処理を実行する判定工程と、前記受信したアドレス帳を前記記憶装置にインポートするアドレス帳インポート工程と

20

、を有し、前記判定工程では、前記判定処理として、前記受信したアドレス帳の名称がデフォルト名称であるか否かが判定され、

前記受信したアドレス帳の名称がデフォルト名称であると判定された場合には、前記インポートされるアドレス帳の名称として、前記記憶装置で格納されていたアドレス帳の名称が利用され、

前記受信したアドレス帳の名称がデフォルト名称でないと判定された場合には、前記インポートされるアドレス帳の名称として、前記受信したアドレス帳の名称が利用されることを特徴とする制御方法。

【請求項 7】

30

請求項 1 乃至 5 のいずれか 1 項に記載の通信装置の各手段としてコンピュータを機能させることを特徴とするプログラム。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、通信装置とその制御方法、及びプログラムに関する。

【背景技術】

【0002】

従来、デジタル複合機等の画像処理装置では、スキャンした文書のデータを電子化し、任意の送信宛先に電子メールで送信する機能やファイル送信（SMB送信等）する機能を有している。これら電子メールやファイルを送信する際の宛先データは、その画像処理装置が管理しているアドレス帳の中に保存されている。特許文献 1 には、アドレス帳に宛先データを保存する際、宛先データの検索効率を高めるために、宛先データを分類して保存できることが記載されている。

40

【0003】

また、これらアドレス帳に記憶された宛先データは、外部のコンピュータ端末からウェブブラウザ経由で外部に取出して（エクスポート）、別の画像処理装置に格納（インポート）することができる。また特許文献 2 には、コンピュータ端末を介さずに、画像処理装置間で直接通信して、一方の画像処理装置のアドレス帳に記憶された宛先データをエクスポートして、直接、他方の画像処理装置にインポートすることが記載されている。

50

【 0 0 0 4 】

特許文献 3 には、誰でも参照可能なアドレス帳の宛先データを外部のコンピュータ端末からウェブブラウザ経由でエクスポートし、別の画像処理装置の特定ユーザしかアクセスできないアドレス帳にインポートすることが記載されている。

【 先行技術文献 】

【 特許文献 】

【 0 0 0 5 】

【 特許文献 1 】 特開 2 0 0 1 - 3 5 8 8 6 4 号公報

【 特許文献 2 】 特開 2 0 0 6 - 3 3 4 5 9 号公報

【 特許文献 3 】 特開 2 0 1 6 - 1 9 1 4 8 号公報

10

【 発明の概要 】

【 発明が解決しようとする課題 】

【 0 0 0 6 】

しかしながら、特許文献 3 のように、誰でも参照可能なアドレス帳の宛先表の宛先データを別の画像処理装置の特定ユーザしかアクセスできないアドレス帳にインポートした場合、インポート方法によってはアドレス帳の宛先表の名称が重複する場合がある。例えば、インポート先のアドレス帳の宛先表を全て削除してから宛先表をインポートするモード（削除後上書きモード）で宛先表のインポートを行うと、宛先表の名称及び宛先データを全て削除した後に宛先表のインポートが行われる。この場合、インポート元である宛先表の名称がデフォルト名称のままであると、同一のデフォルト名称でインポートされるため、ユーザは、インポート先の宛先表の名称で区別できなくなるという課題が発生する。例えば、図 4 の宛先表のリスト 4 0 1 が表示されている状態で、デフォルト名称「宛先表 1」の宛先表データをグループ宛先表 1 にインポートすると、「宛先表 1」というデフォルト名称の宛先表が重複して発生する。

20

【 0 0 0 7 】

本発明の目的は、上記従来技術の課題を解決することにある。

【 0 0 0 8 】

本発明の目的は、アドレス帳のインポート時に、アドレス帳の名称がデフォルト名称のまま重複してインポートされるのを防止する技術を提供することにある。

【 課題を解決するための手段 】

30

【 0 0 0 9 】

上記目的を達成するために本発明の一態様に係る通信装置は以下のような構成を備える。即ち、

アドレス帳を格納する記憶装置を備える通信装置であって、
前記記憶装置にインポートされるべきアドレス帳を外部装置から受信する受信手段と、
前記受信したアドレス帳についての判定処理を実行する判定手段と、
前記受信したアドレス帳を前記記憶装置にインポートするアドレス帳インポート手段と
を有し、

前記判定手段は、前記判定処理として、前記受信したアドレス帳の名称が、ユーザによる変更に従い設定された名称でないデフォルト名称であるかを判定し、

40

前記受信したアドレス帳の名称がデフォルト名称であると判定された場合には、前記インポートされるアドレス帳の名称として、前記記憶装置で格納されていたアドレス帳の名称が利用され、

前記受信したアドレス帳の名称がデフォルト名称でないと判定された場合には、前記インポートされるアドレス帳の名称として、前記受信したアドレス帳の名称が利用されることを特徴とする。

【 発明の効果 】

【 0 0 1 0 】

本発明によれば、アドレス帳のインポート時に、アドレス帳の名称がデフォルト名称のまま重複してインポートされるのを防止できる。

50

【 0 0 1 1 】

本発明のその他の特徴及び利点は、添付図面を参照とした以下の説明により明らかになるであろう。なお、添付図面においては、同じ若しくは同様の構成には、同じ参照番号を付す。

【 図面の簡単な説明 】

【 0 0 1 2 】

添付図面は明細書に含まれ、その一部を構成し、本発明の実施形態を示し、その記述と共に本発明の原理を説明するために用いられる。

【 図 1 】 本発明の実施形態 1 に係るシステム全体の構成を説明する図。

【 図 2 】 実施形態 1 に係る画像処理装置のハードウェア構成を説明するブロック図。

【 図 3 】 実施形態 1 に係る画像処理装置におけるアドレス帳関連モジュールの構成の例を説明する図。

【 図 4 】 実施形態 1 に係る画像処理装置の操作部に表示された宛先表の名称リストの表示例を示す図。

【 図 5 】 宛先表 D B、個人宛先表 D B 及びグループ宛先表で管理されている宛先表データの管理を説明する図。

【 図 6 】 実施形態 1 において、各ユーザがどのユーザグループに紐付いているかを登録する管理テーブルの一例を示す図。

【 図 7 】 実施形態 1 に係るユーザグループ、グループ宛先表、宛先データの関連を説明する図。

【 図 8 】 図 5 に示す宛先表データをエクスポートしたデータ（インポート用宛先表データ）の一例を示す図。

【 図 9 】 実施形態 1 に係るコンピュータのウェブブラウザにより表示された画像処理装置にインポートする場合のインポート画面例を示す図（ A ）と、インポート用宛先表データのデータ構造を示す図（ B ）。

【 図 1 0 】 実施形態 1 に係る画像処理装置 1 0 5 における宛先表データのインポート処理を説明するフローチャート。

【 図 1 1 】 S 1 0 0 8 のインポート処理が完了した後の「システム第 1 設計部」の宛先表データを例示した図。

【 図 1 2 】 実施形態 2 に係る画像処理装置 1 0 5 における宛先表データのインポート処理を説明するフローチャート。

【 図 1 3 】 実施形態 3 に係る画像形成装置の操作部に表示される確認画面の一例を示す図。

【 発明を実施するための形態 】

【 0 0 1 3 】

以下、添付図面を参照して本発明の実施形態を詳しく説明する。尚、以下の実施形態は特許請求の範囲に係る本発明を限定するものでなく、また本実施形態で説明されている特徴の組み合わせの全てが本発明の解決手段に必須のものとは限らない。

【 0 0 1 4 】

[実施形態 1]

図 1 は、本発明の実施形態 1 に係るシステム全体の構成を説明する図である。

【 0 0 1 5 】

画像処理装置 1 0 3 及び 1 0 5 は、例えばスキャン機能、印刷機能、ファクシミリ機能、ボックス機能などを有する多機能処理装置（ M F P ）である。画像処理装置 1 0 3 及び 1 0 5 は、例えばスキャンにより得られた原稿の画像データを電子化し、それをネットワーク 1 0 4 を介して、外部装置の一例であるコンピュータ 1 0 1 の共有フォルダ等に送信できる。また画像処理装置 1 0 3 及び 1 0 5 はユーザ認証機能を有しており、画像処理装置 1 0 3 或いは 1 0 5 をユーザが操作する際、そのユーザの認証が必要か否かをデバイス管理者が設定可能である。尚、このユーザ認証に必要な各ユーザのユーザ名、パスワード等は、画像処理装置 1 0 3 や 1 0 5 で管理することも可能であるが、ネットワーク 1 0 4

10

20

30

40

50

上の認証サーバ102で管理することも可能である。

【0016】

また画像処理装置103は、画像処理装置103が保存している宛先表リスト(図4を参照して後述する)を含む宛先データを、ネットワーク104を介してコンピュータ101上のウェブブラウザからエクスポートできる。こうしてエクスポートされた宛先表リストを含む宛先表データ(以降、インポート用宛先表データ)は、コンピュータ101によりネットワーク104を介して別の画像処理装置105にインポートされる。また画像処理装置103がネットワーク104を介して画像処理装置105と接続することによって、コンピュータ101を介することなく、宛先データを直接、画像処理装置103から画像処理装置105に配信することが可能である。

10

【0017】

尚、以下の説明では、画像処理装置103からコンピュータ101に宛先表データをインポートし、コンピュータ101から画像処理装置105にインポートする場合で説明するが、逆の場合でも良い。

【0018】

図2は、実施形態1に係る画像処理装置103のハードウェア構成を説明するブロック図である。尚、以下の説明は画像処理装置105にも適用される。

【0019】

CPU201は、ROM209に格納されたプログラムをRAM208に展開し、その展開したプログラムを実行することによって画像処理装置103全体の動作を制御する。またCPU201は、バス202を介して画像処理装置103の各構成と通信を行う。プリンタ204は、入力された画像データに基づく画像を記録紙(シート)上に印刷する。スキャナ205は、ユーザが原稿台上にセットした原稿の画像を読み取り、読み取って得られた画像データをHDD203或いはRAM208等に格納する。スキャナ205は、不図示の原稿給送装置を含み、原稿給送装置にセットされた複数枚の原稿を順次原稿台上に給送後、読み取ることが可能である。HDD203はハードディスクドライブであり、スキャナ205から入力された画像データや、各種ユーザーデータ(アドレス帳等)を保存可能である。操作部206は、ユーザが指示を行うための複数のキー、ユーザに通知すべき各種情報を表示する表示部を含む。ネットワークI/F207は、画像処理装置103をネットワーク104に接続し、スキャナ205でスキャンした画像データをネットワーク上のファイル共有サーバ(不図示)へのデータの送信を制御する。FAX210は、電話回線を介して画像データの送受信を行う。

20

30

【0020】

図3は、実施形態1に係る画像処理装置103におけるアドレス帳関連モジュールの構成の例を説明する図である。図3に示す各モジュールは、ROM209に格納されたプログラムに相当し、そのプログラムは実行時にRAM208に展開され、CPU201がその展開したプログラム実行することにより、そのモジュールの機能が実現される。

【0021】

アドレス帳管理モジュール301は、各種宛先表データ(宛先表の名称及び宛先データ)の管理を行う。アドレス帳管理モジュール301が管理している宛先表データの内、全ユーザがアクセス可能な宛先表データは、HDD203の宛先表DB(データベース)310に保存されている。

40

【0022】

ユーザ個人/グループモジュール302は、各ユーザのユーザ情報(ログインID(ユーザID)、パスワード等)及び各ユーザがどのユーザグループに紐付いているかを管理している(図6を参照して後述する)。個人/グループ宛先表管理モジュール303は、ユーザ個人のみがアクセス可能な個人用宛先表データ、及び、あるユーザグループに所属している各ユーザのみがアクセス可能なグループ宛先表データを管理している。個人/グループ宛先表管理モジュール303が管理している宛先表データ(宛先表の名称及び宛先データ)の内、個人用宛先表データは、HDD203の個人宛先表DB311に保存され

50

る。またグループ宛先表データはHDD203のグループ宛先表DB312に保存されている。

【0023】

アドレス帳管理モジュール301は、個人/グループ宛先表管理モジュール303を介して個人宛先表データ及びグループ宛先表データを管理している。

【0024】

ここで各宛先表DB310～312は、複数の宛先表を登録することができる。

【0025】

図4は、実施形態1に係る画像処理装置103の操作部206に表示された宛先表の名称リストの表示例を示す図である。このリスト401は、宛先表DB310、個人宛先表DB311、グループ宛先表DB312に記憶されている宛先表の名称の一覧を表示した例を示している。

10

【0026】

アドレス帳管理モジュール301は、操作部206から宛先表の名称リスト401の表示要求を受けると、HDD203に保存している宛先表DB310、個人宛先表DB311及びグループ宛先表312から各宛先表の名称を取得する。そして、その取得した名称リスト401を操作部206に表示する。尚、操作部206から宛先表の名称リスト401の表示要求を行うときは、宛先表DB310、個人宛先表DB311及びグループ宛先表312の内の特定の宛先表DBの宛先表の名称リストだけを表示するように指示することも可能である。

20

【0027】

宛先表DB310、個人宛先表DB311及びグループ宛先表312に登録されている宛先表の名称は、ユーザが任意の名称を登録できる。しかし、ユーザが明示的に名称を設定しなかった場合は、アドレス帳管理モジュール301がデフォルトの宛先表の名称を設定する。アドレス帳管理モジュール301が設定するデフォルトの宛先表の名称は、宛先表DB310、個人宛先表DB311及びグループ宛先表312で重複しない名称に設定される。例えば、宛先表DB310に設定する宛先表の名称には「宛先表」、個人宛先表DB311に設定する宛先表の名称には「個人宛先表」、グループ宛先表DB312に設定する宛先表の名称には「グループ宛先表」を設定する。

【0028】

次に操作部206に表示されている宛先表の名称リスト401から、ユーザが任意の宛先表の名称を選択する。これによりアドレス帳管理モジュール301は、その選択された宛先表が格納されている宛先表DBから宛先データを取得して宛先表示部402に表示する。図4の例では、リスト401から「宛先表1」が選択され、その宛先表の名称(¥sm host¥user1)と宛先データ(user1@test.com)が宛先表示部402に表示された状態を示している。また図4では、「システム第1設計部」と表示されているグループ宛先表の名称以外は、デフォルトの宛先表の名称である。

30

【0029】

図5(A)～(C)は、宛先表DB310、個人宛先表DB311及びグループ宛先表312で管理されている宛先表データの管理を説明する図である。

40

【0030】

図5(A)は、宛先表DB310で管理されている宛先表データの一例を説明する図である。この宛先表DB310には、合計10の宛先表が格納されており、各宛先表の宛先表ID501として「1」～「10」がユニークに割り当てられている。また各宛先表に対して宛先表の名称502と宛先データ503が紐付けられてHDD203に保存されている。

【0031】

図5(B)は、グループ宛先表DB312で管理されている宛先表データの一例を説明する図である。

【0032】

50

グループ宛先表のそれぞれには、グループ宛先表ID504が「1」～「N」（Nは設定に応じて動的に変化する）までユニークに割り当てられている。また各グループ宛先表には、グループ宛先表の名称505と、アクセス可能な所属グループ506と、宛先データ507がそれぞれ紐付けられてHDD203に保存されている。図5（B）では、グループ宛先表ID504が「2」の名称がデフォルトの名称でないことが分かる。

【0033】

図5（C）は、個人宛先表DB311で管理されている宛先表データの一例を示す図である。

【0034】

個人宛先表のそれぞれには、個人宛先表ID508が「1」～「N」（Nは設定に応じて動的に変化する）までユニークに割り当てられている。また各個人宛先表には、個人宛先表の名称509と、アクセス可能な所属ユーザ510と宛先データ511がそれぞれ紐付けられてHDD203に保存されている。ここで、個人宛先表の名称509のデフォルト名称には、デフォルト名称の後に名称を一意にするための数字は付与されない。これは、個人宛先表が、各ユーザが所有者である宛先表であり、他のユーザによるアクセスができないためである。

【0035】

図5（D）は、宛先データとして保存されているデータの一例を示しており、宛先名称や送信するホスト名等が保存される。

【0036】

図6は、実施形態1において、各ユーザがどのユーザグループに紐付いているかを登録する管理テーブルの一例を示す図である。この管理テーブルはHDD203に記憶されている。

【0037】

各ユーザグループには、ユニークなグループID601が割り当てられている。602は、そのユーザグループの名称を示す。また各ユーザグループには、アクセス可能なユーザ認証の所属ユーザ603が割り当てられている。例えば、グループID601が「1」の「GroupA」には、アクセス可能なユーザ認証の所属ユーザ603として「UserA」、「UserB」、「UserC」が割り当てられている。

【0038】

ユーザ個人/グループモジュール302は、アドレス帳管理モジュール301から受け取ったユーザの名称をこの管理テーブルから検索し、そのユーザが属している全てのユーザグループのリストをアドレス帳管理モジュール301に返却する。

【0039】

図7は、実施形態1に係るユーザグループ、グループ宛先表、宛先データの関連を説明する図である。

【0040】

各ユーザグループ（GroupA等）のノードの下層に、各グループの宛先表が紐付けられており、更に、その下層に宛先データが紐付けられるツリー構造で管理されている。

【0041】

図8（A）は、図5（A）に示す宛先表ID501が「1」の宛先表データをエクスポートしたデータ（インポート用宛先表データ）の一例を示す図である。

【0042】

ここで、「AddressBook Name」の欄には、この宛先表の名称（ここでは「宛先表1」）が設定されている。尚、このとき、デフォルトの宛先表の名称が設定されている場合は、この項目にデフォルトの宛先表の名称をそのまま設定することもできるが、名称を設定しないことで、デフォルトの宛先表の名称として扱うことも可能である。「AddressBook ID」の識別子は、宛先表の種別を表している。ここで「AddressBook ID」の「1」は、宛先表DB310に格納されている、通常の宛先表であることを示している。

【0043】

10

20

30

40

50

図 8 において、「<」と「>」とで囲まれたデータが 1 つの宛先データを示しており、図 8 (A) のインポート用宛先表データには、図 5 (A) から、3 つの宛先データ (宛先 1、宛先 2、宛先 3) が含まれている。

【 0 0 4 4 】

図 8 (B) は、図 5 (B) の宛先表 ID が「 2 」であるグループ宛先表の宛先表データをエクスポートしたデータ (インポート用宛先表データ) の一例を示す図である。

【 0 0 4 5 】

「GroupAddressBook Name」には、このグループ宛先表の名称 (ここでは「システム第 1 設計部」が設定されている。ここでデフォルトの宛先表の名称が設定されている場合は、そのデフォルトの宛先表の名称をそのまま設定できるが、名称を設定しないことで、デフォルトの宛先表の名称として扱うことも可能である。「GroupAddressBook ID」の識別子は、宛先表の種別を表わしている。ここでこの種別「 2 」は、図 5 (B) に示すグループ宛先表 DB 3 1 2 に格納されているグループ宛先表であることを示している。そして、図 5 (B) から、このインポート用宛先表データは、2 つの宛先データ (宛先 C、宛先 D) が含まれている。

【 0 0 4 6 】

図 8 (C) は、図 5 (C) の宛先表 ID が「 1 」の個人宛先表の宛先表データをエクスポートしたデータ (インポート用宛先表データ) の一例を示す図である。

【 0 0 4 7 】

「MyAddressBook Name」には、個人宛先表の宛先表の名称 (ここでは「個人宛先表」) が設定されている。ここでデフォルトの宛先表の名称が設定されている場合は、そのデフォルトの宛先表の名称をそのまま設定することも可能であるが、名称を設定しないことでデフォルトの宛先表の名称として扱うことも可能である。「MyAddressBook ID」の識別子は、宛先表の種別を表わしており、「 1 」は個人宛先表 DB 3 1 1 に格納されている個人宛先表であることを示している。そして図 5 (C) から、このインポート用宛先表データには、2 つの宛先データ (宛先 A 1、宛先 A 2) が含まれている。

【 0 0 4 8 】

これら図 8 に示すインポート用宛先表データは、コンピュータ 1 0 1 の記憶装置 (例えば HDD 等) に記憶されている。

【 0 0 4 9 】

図 9 (A) は、コンピュータ 1 0 1 のウェブブラウザにより表示された、例えば図 8 に示すインポート用宛先表データを、ネットワーク 1 0 4 を介して、画像処理装置 1 0 5 にインポートする場合の画面例を示す図である。

【 0 0 5 0 】

インポート先の宛先表 9 0 1 は、ここではインポート先の画像処理装置 1 0 5 から取得した宛先表 DB 3 1 0、個人宛先表 DB 3 1 1 及びグループ宛先表 3 1 2 で管理されている宛先表データの一覧を表示している。ここでは例えば図 8 に示すインポート用宛先表データを、画像処理装置 1 0 5 のどの宛先表に対してインポートするかを指定するための項目を表示しており、リスト表示をスクロールバー 9 0 4 でスクロールすることで任意の宛先表を指定できる。図 9 (A) の例では、インポート先として「システム第 1 設計部」9 1 0 が選択されている。

【 0 0 5 1 】

インポート元の宛先表 9 0 2 は、画像処理装置 1 0 3 からエクスポートされてコンピュータ 1 0 1 に保存されている、インポート用宛先表データの場所を指定するための項目である。インポート方法 9 0 3 は、例えば図 8 に記載のインポート用宛先表データをインポートする際のモードを設定するための項目である。ここで「追加」を選択した場合は、インポート先の宛先表データは保持したまま、インポート元の宛先表 9 0 2 で指定したインポート用宛先表データの宛先データのみを、インポート先の宛先表 9 0 1 の宛先表データに追加するようにインポートする。

【 0 0 5 2 】

10

20

30

40

50

一方、図9(A)のように「削除後上書き」を選択した場合は、インポート先の宛先表901で指定した宛先表データを全て削除した後に、インポート元の宛先表902で指定したインポート用宛先表データをインポートする。

【0053】

このように図9(A)の画面で各項目を設定した後、インポート開始ボタン905を押下すると、図9(B)に示すデータ構造で、ネットワーク104を介して画像処理装置105に対してインポートが実行される。

【0054】

図9(B)のデータ構造には、図9(A)で設定した各項目が設定されることにより、画像処理装置103に対して宛先表データのインポートを行うことが可能である。図9(B)では、インポート方法として「削除後上書き」が、インポート先として、宛先表DB310に格納されている、「AddressBook ID:2」が指定されている。

10

【0055】

図10は、実施形態1に係る画像処理装置105における宛先表データのインポート処理を説明するフローチャートである。尚、このフローチャートで示す処理は、画像処理装置105のROM209に格納されたプログラムをRAM208に展開した後、CPU201がその展開したプログラムを実行することにより達成される。

【0056】

尚、この実施形態1では、図8(A)のインポート用宛先表データを、インポート先の宛先表901で「システム第1設計部」に指定してインポートする例で説明する。ここで、インポートする前のインポート先の「システム第1設計部」の宛先表データは、例えば図5(B)の宛先表データとする。

20

【0057】

このフローチャートで示す処理は、例えば図9(A)の画面で「インポート開始」ボタン905が押下されて、コンピュータ101から、インポート用宛先表データを図9(B)のデータ構造で受信することにより開始される。

【0058】

まずS1001でCPU201はアドレス帳管理モジュール301として機能し、図9(B)に示すデータ構造のインポート用宛先表データを受信してS1002に処理を進める。S1002でCPU201は、インポート方法に設定されているインポート方法を判定する。ここでインポート方法が「追加」であればS1011に進み、CPU201は、図9(B)のデータからインポート先の宛先表を取得する。そして、その取得した宛先表に対して図9(B)の宛先表データから宛先データを取得し、既存の宛先表データに対して追加インポート処理を実行して、この処理を終了する。このとき、インポート先の宛先表が、個人宛先表か、グループ宛先表の場合は、個人/グループ宛先表管理モジュール303を経由してインポート処理を実行する。

30

【0059】

一方、S1002でCPU201は、インポート方法が「削除後上書き」であると判定した場合はS1003に進み、図9(B)の宛先表データから宛先表の種別を取得する。この宛先表の種別の取得は、図8を参照して説明した、「AddressBook ID/GroupAddressBook ID/MyAddressBook ID」の識別子を取得することで行われる。次にS1004に進みCPU201は、S1003で取得したインポート元の宛先表の種別と、図9(B)のインポート先が示す宛先表の種別が異なっているかどうか判定する。ここで異なると判定した場合はS1005に進み、図9(B)の宛先表データから宛先表の名称を取得する。この宛先表の名称の取得は、図8の宛先表データで説明した、「AddressBook Name/GroupAddressBook Name/MyAddressBook Name」の識別子に設定されている名称を取得することで行われる。そしてS1006に進みCPU201は、その取得した宛先表の名称が、デフォルト名称かどうか判定する。ここでデフォルト名称かどうかは、図8で説明したように、宛先表毎のデフォルトの名称と一致している場合と、名称が設定されていない場合のいずれかである。S1006でCPU201は、デフォルトの名称が設定されていると判

40

50

定したときはS1007に進み、図9(B)のインポート先が示す宛先表を取得し、そのインポート先の宛先データのみを削除する。そしてS1008に進みCPU201は、図9(B)の宛先表データから宛先データのみを取得し、その宛先データをインポート先の宛先表にインポートして、この処理を終了する。

【0060】

このように削除後上書きの場合、インポート用宛先表データの宛先表の名称がデフォルトの名称であれば、インポート先の宛先表の名称を残して、その宛先データだけを書き換える。

【0061】

図11は、S1008のインポート処理が完了した後の「システム第1設計部」の宛先表データを例示した図である。尚、図11において、前述の図5(B)と共通する部分は同じ参照番号で示している。

10

【0062】

図11のグループ宛先表IDが「2」の宛先データでは、グループ宛先表の名称505にはインポート前のグループ宛先表の名称(システム第1設計部)がそのまま保持されている。一方、宛先データ507では、図8(A)のインポート用宛先表データに含まれる宛先データが、図5(B)の「宛先C、宛先D」から「宛先1、宛先2、宛先3」に置き変わっている。

【0063】

またS1006でCPU201は、デフォルトの名称が設定されていないと判定した場合はS1009に進み、図9(B)のデータのインポート先の宛先表を取得し、インポート先の宛先表データの宛先表の名称と宛先データを削除する。そしてS1010に進みCPU201は、図9(B)のデータの宛先表データを取得し、インポート先の宛先表にインポートして、この処理を終了する。

20

【0064】

またS1004の判定で、宛先表の種別が一致しているときはS1009及びS1010の処理を実行して、この処理を終了する。

【0065】

以上説明したように実施形態1によれば、デフォルトの宛先表の名称が設定されたインポート用宛先データを、削除後上書きモードで異なる種別の宛先表にインポートする際、同一のデフォルトの宛先表の名称が重複して設定されるのを防止できる。

30

【0066】

また宛先表の名称がデフォルト、或いは設定されていない場合は、インポート先の宛先表の名称が保存されるため、ユーザは宛先表の名称で宛先データの種別を判定できるようになり、ユーザビリティを向上できる。

【0067】

[実施形態2]

図12は、実施形態2に係る画像処理装置105における宛先表データのインポート処理を説明するフローチャートである。尚、このフローチャートで示す処理は、ROM209に格納されたプログラムをRAM208に展開した後、CPU201がその展開したプログラムを実行することにより達成される。尚、図12において、前述の図10と共通する処理ステップは同じ参照番号で示し、それらの説明を省略する。尚、実施形態2に係るシステム構成及び画像処理装置103、105の構成は、前述の実施形態1と同様であるため、その説明を省略する。

40

【0068】

実施形態2では、前述の図10のフローチャートで示す処理に、S1201の処理が追加になっている以外は前述の図10の処理と同一であるため、その異なる点についてのみ説明する。

【0069】

S1004の判定で宛先表の種別が異なっていないと判定するとS1201に進みCP

50

U 2 0 1 は、インポート用宛先データの宛先表の種別に設定されている I D と、インポート先の宛先表の種別に設定されている I D とが異なっているかを判定する。

【 0 0 7 0 】

この宛先表の種別に設定されている I D とは、例えば前述の図 8 で説明した AddressBook ID / GroupAddressBook ID / MyAddressBook ID の各識別子に設定されている値を指す。

8 (A) の場合は、宛先表の識別子である AddressBook ID は「 1 」である。また、この I D は図 5 (A) ~ (C) で説明した各宛先表 I D (5 0 1 , 5 0 4 , 5 0 8) と同じである。S 1 2 0 1 で C P U 2 0 1 が、宛先表の種別に設定されている I D の値が異なっていると判定した場合は S 1 0 0 5 に進み、インポート用宛先データの宛先表の名称がデフォルトであれば、インポート先の宛先表の宛先データのみを更新する。一方、S 1 2 0 1 で、インポート用宛先データの宛先表の種別に設定されている I D と、インポート先の宛先表の種別に設定されている I D とが一致するときは S 1 0 0 9 に進み、インポート用宛先データの宛先表でたで、インポート先の宛先表を更新する。

10

【 0 0 7 1 】

以上説明したように実施形態 2 によれば、デフォルトの宛先表の名称が設定されたインポート用宛先データを、削除後上書きモードでインポートする際、同一種別でない宛先表の名称がデフォルトの名称に変更されるのを防止できる。これにより、同一のデフォルトの宛先表の名称が重複して設定されるのを防止できる。

【 0 0 7 2 】

[実施形態 3]

前述の実施形態 1 , 2 では、図 1 0 及び図 1 2 の S 1 0 0 6 でインポート用宛先表データに含まれる宛先表の名称にデフォルト名称が設定されていると判定された場合にのみ、インポート先の宛先表の名称を設定しないようにしていた。これに対して実施形態 3 では、S 1 0 0 6 のデフォルト名称の判定処理は行わずに、常にインポート先の宛先表の名称を削除しないようにしても良い。つまり、S 1 0 0 5 の処理の後に、常に S 1 0 0 7 、 S 1 0 0 8 の処理を実行するようにしても良い。尚、実施形態 3 に係るシステム構成及び画像処理装置 1 0 3 , 1 0 5 の構成は、前述の実施形態 1 と同様であるため、その説明を省略する。

20

【 0 0 7 3 】

実施形態 3 によれば、常にインポート先の宛先表の名称を残すことが可能となり、同一のデフォルトの宛先表の名称が重複して設定されることを防ぐことが可能になる。

30

【 0 0 7 4 】

[実施形態 4]

前述の実施形態 1 ~ 3 では、インポート先の画像処理装置で、インポート用宛先表データに含まれる宛先表の名称を使用するか、インポート先の宛先表の名称を使用するかを切り替えていた。これに対して実施形態 4 では、S 1 0 0 6 の処理を、インポート用宛先表データに含まれる宛先表の名称とインポート先の宛先表の名称とが一致するか否かを判定処理に置き換える。そして宛先表の名称が一致しない場合は、図 1 3 に図示したような確認画面を操作部 2 0 6 に表示させて、ユーザにどちらの宛先表の名称を使用するかを選択させる。尚、実施形態 4 に係るシステム構成及び画像処理装置 1 0 3 , 1 0 5 の構成は、前述の実施形態 1 と同様であるため、その説明を省略する。

40

【 0 0 7 5 】

図 1 3 は、実施形態 3 に係る画像形成装置 1 0 5 の操作部 2 0 6 に表示される確認画面の一例を示す図である。

【 0 0 7 6 】

図 1 3 では、インポート元とインポート先の宛先表の名称を同時に表示することで、ユーザビリティの向上を図ることが可能である。

【 0 0 7 7 】

図 1 3 の画面で「インポート元の宛先表の名称」を選択した場合は、図 1 0 の S 1 0 0 9 , S 1 0 1 0 の処理を実行することで、インポート先の宛先表の名称を、インポート元

50

の宛先表の名称に設定することが可能となる。

【0078】

また図13の画面で「インポート先の宛先表の名称」を選択した場合は、S1007、S1008の処理を実行することで、インポート先の宛先表の名称を維持することが可能となる。

【0079】

実施形態4によれば、ユーザが、インポート元の宛先表の名称とインポート先の宛先表の名称のいずれを残すか選択できるため、インポート先の宛先表の名称を、ユーザが意図した宛先表の名称に設定できる。

【0080】

また上述の実施形態では、インポート用の宛先表データには、1つの宛先表の種別と1つの宛先表の名称しか含まれていなかった。しかし、複数の宛先表の種別と複数の宛先表の名称があり、それぞれに対して複数の宛先データが含まれている場合にも適用可能である。つまり、複数の宛先表の種別がある場合は、S1003とS1004の処理を複数の宛先表の種別に対して処理を行い、1つでも異なるものが含まれていればS1005以降の処理を行う。

【0081】

また宛先表の名称についても同様に、S1005とS1006の処理を複数の宛先表の名称に対して処理を行い、1つでもデフォルト名称が含まれていればS1007以降の処理を行うようにすればよい。

【0082】

(その他の実施形態)

本発明は、上述の実施形態の1以上の機能を実現するプログラムを、ネットワーク又は記憶媒体を介してシステム又は装置に供給し、そのシステム又は装置のコンピュータにおける1つ以上のプロセッサがプログラムを読み出し実行する処理でも実現可能である。また、1以上の機能を実現する回路(例えば、ASIC)によっても実現可能である。

【0083】

本発明は上記実施形態に制限されるものではなく、本発明の精神及び範囲から離脱することなく、様々な変更及び変形が可能である。従って、本発明の範囲を公にするために、以下の請求項を添付する。

【符号の説明】

【0084】

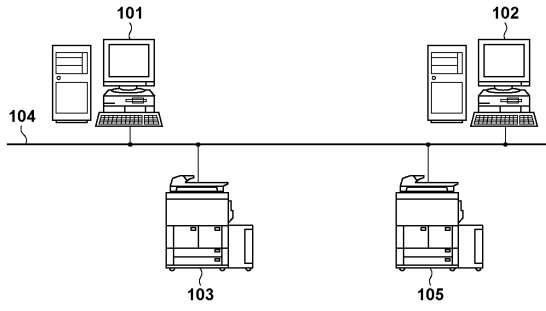
101...コンピュータ、103、105...画像処理装置、201...CPU、203...HDD、206...操作部、208...RAM、209...ROM、301...アドレス帳管理モジュール、302...ユーザ個人/グループモジュール、303...個人/グループ宛先表管理モジュール

10

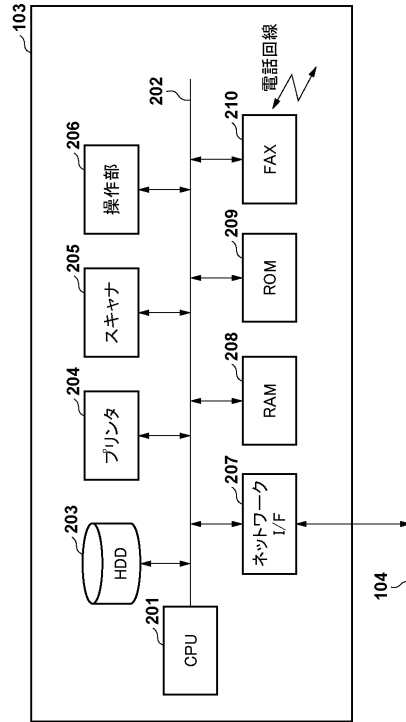
20

30

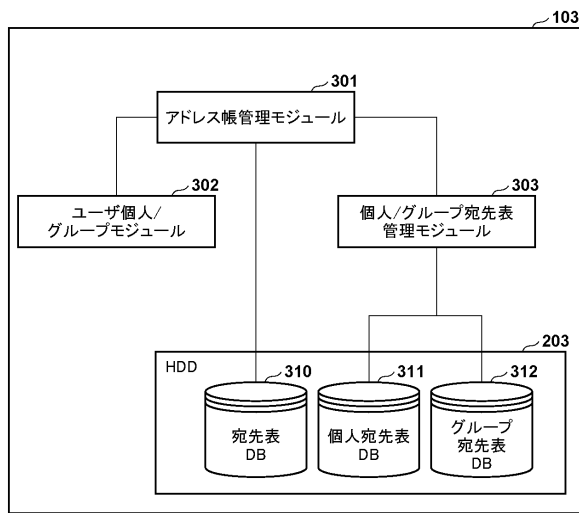
【図1】



【図2】



【図3】



【図4】

<宛先リスト>

402		宛先表1
名称	送信宛先	
user1フォルダ	¥¥smbhost1¥user1	宛先表1
user1メール	user1@test.com	宛先表2
		宛先表3
		宛先表4
		宛先表5
		宛先表6
		宛先表7
		宛先表8
		宛先表9
		宛先表10
		個人宛先表
		グループ宛先表1
		システム第1設計部
		グループ宛先表5

401

【 図 5 】

(A)

宛先表ID	宛先表の名称	宛先データ
1	宛先表1	宛先1,宛先2,宛先3
2	宛先表2	宛先4,宛先5
⋮	⋮	⋮
10	宛先表10	宛先99,宛先100

(B)

グループ宛先表ID	グループ宛先表の名称	所属グループ	宛先データ
1	グループ宛先表1	GroupA,GroupB,GroupC	宛先A,宛先B
2	システム第1設計部	GroupB,GroupD	宛先C,宛先D
⋮	⋮	⋮	⋮
N	グループ宛先表N	GroupA,GroupN	宛先X,宛先Y,宛先Z

(C)

個人宛先表ID	個人宛先表の名称	所属ユーザ	宛先データ
1	個人宛先表	UserA	宛先A1,宛先A2
2	個人宛先表	UserB	宛先A4,宛先A5
⋮	⋮	⋮	⋮
N	個人宛先表	UserN	宛先A9,宛先A10

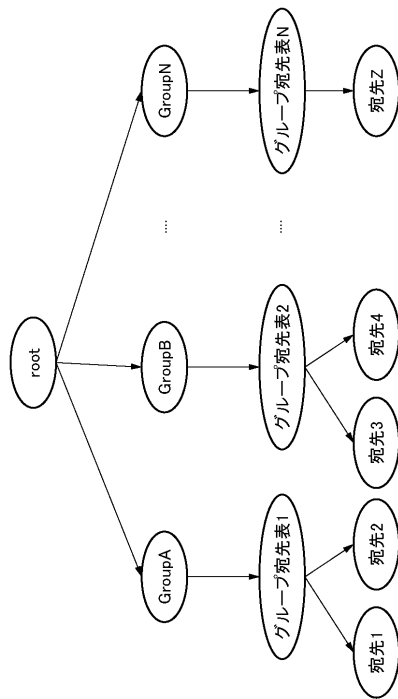
(D)

宛先名称	グループSMB
ホスト名	172.24.1.1
フォルダーパス名	¥\$mb¥path
ユーザ名	userA
パスワード	*****

【 図 6 】

グループID	ユーザグループ	所属ユーザ
1	GroupA	UserA,UserB,UserC
2	GroupB	UserB,UserD
⋮	⋮	⋮
N	GroupN	UserA,UserN

【 図 7 】



【 図 8 】

(A)

```

AddressBook ID:1
AddressBook Name:宛先表1
<
  cn:$SMBユーザ/1
  url:172.24.1.1
  path:$mb¥path
  username:userA
  pwd:$X7oSK6B7al3WLa9e6Wqerf6WEqscBk/
  protocol:Smb
  >
  cn:共有FTPサーバ
  url:172.24.1.1
  path:/path
  pwd:$X7oSK6B7al3WLa9e6Wqerf6WEqscBk/
  protocol:FTP
  >
  cn:$SMBユーザ/2
  url:172.24.1.1
  path:$mb¥path
  username:userC
  pwd:tpGarf64W0gt1Xq7oSK6B7al3WLa9e6Wqerf6WEqscBk/
  protocol:Smb
  >
  </pre>


(B)



```

GroupAddressBook ID:2
GroupAddressBook Name:システム第1設計部
<
 cn:11設計部SMB
 url:192.24.3.1
 path:$mb¥share
 username:userz
 pwd:E7aI3WpGAsK6fzE4Wqerf6WEqscBk/
 protocol:Smb
 >
 cn:11設計部FTP
 url:192.24.3.1
 path:$ftp¥share
 pwd:E7aI3WpGAsK6fzE4Wqerf6WEqscBk/
 protocol:FTP
 >
 </pre>

(C)


```

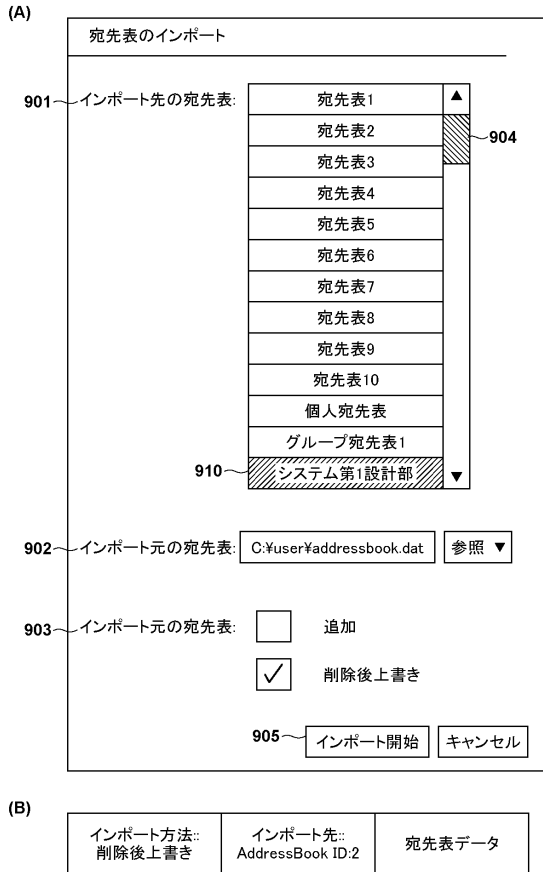
MyAddressBook ID:1
MyAddressBook Name:個人宛先表
<
  cn:mySMB
  url:172.16.1.1
  path:$mb¥path
  pwd:$B0gt1Xq7oL6aNuX6s7aI3WpGarf64Wqerf6WEqscBk/
  protocol:SMB
  >
  cn:mySMB2
  url:172.16.1.1
  path:$mb2¥path
  username:userA
  pwd:$B0gt1Xq7oL6aNuX6s7aI3WpGarf64Wqerf6WEqscBk/
  protocol:SMB
  >
  </pre>

```

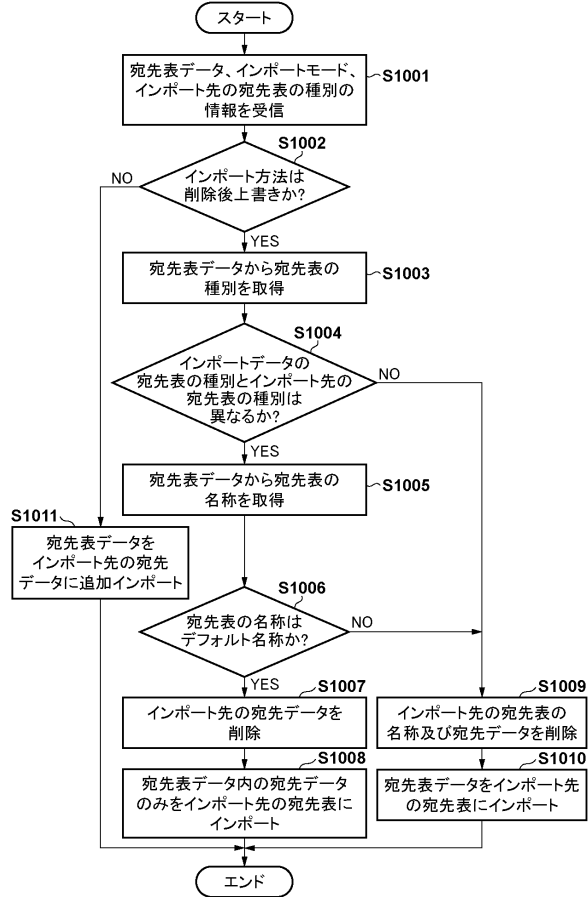

```


```

【図9】



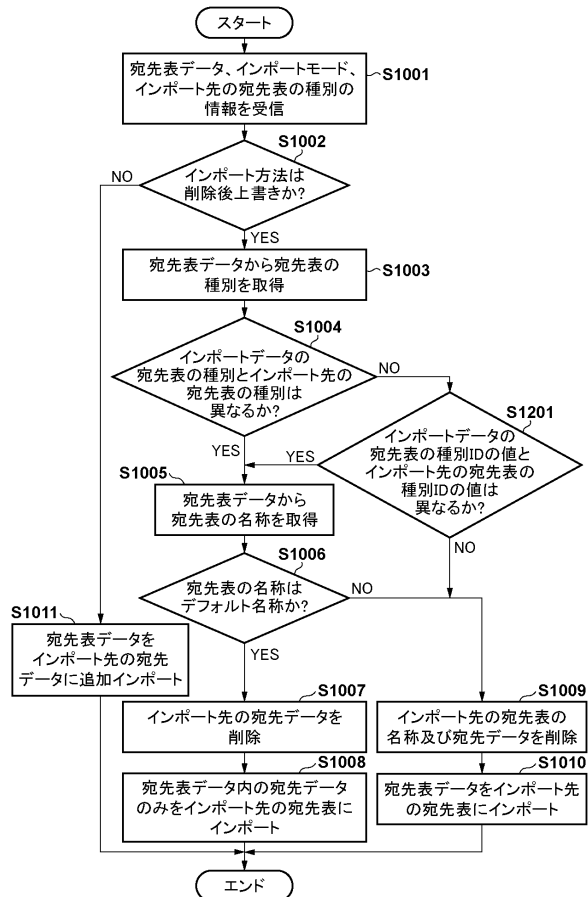
【図10】



【図11】

504 グループ 宛先表ID	505 グループ 宛先表の名称	506 所属グループ	507 宛先データ
1	グループ宛先表1	GroupA, GroupB, GroupC	宛先A, 宛先B
2	システム第1設計部	GroupB, GroupD	宛先1, 宛先2, 宛先3
⋮	⋮	⋮	⋮
N	グループ宛先表N	GroupA, GroupN	宛先X, 宛先Y, 宛先Z

【図12】



【 図 1 3 】

インポート元とインポート先の宛先表の名称が異なります。
どちらの宛先表の名称を使用しますか？

- インポート元の宛先表の名称(宛先表1)
- インポート先の宛先表の名称(システム第1設計部)

フロントページの続き

(72)発明者 寺尾 仁秀
東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社内

審査官 鈴木 明

(56)参考文献 特開2016-19148(JP,A)
特開2013-162494(JP,A)

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)
H04N 1/00